

「本部」革マル反動分子を追放・掃し、 動労大改革へ共に進もう！

全国の動労組合員のみなさん。わが動労千葉は、労働戦線「統一」をめぐって混乱と流動化を深める、日本労働運動の現状を左から突破するたたかう陣型構築にむけて、来る十二月三日・東京・牛込公会堂において、『右翼労線「統一」粉碎・三里塚二期工事着工阻止、十二・三労働者集会』を開催することを決定し、組織化をすすめています。この集会を呼びかけるやいなや、多くの労働組合・労働者は賛同し、動労千葉と共に闘う戦列へと結集しています。こうした、わが動労千葉の組織的前進に比して組織的ジリ貧状況に陥ちいり権力・当局に擁護されて細々と存在するのが、「本部」革マル反動分子と土屋粹一派によってデッチ上げられた「千葉地本」であります。

権力・当局に守られた
「動労佐倉支部大会」

六・十二「津田沼暴力事件」デッチ上げ告訴をもって警察労働運動へと純化した「本部」革マル反動分子と土屋粹一派は、今日、千葉の地においては、鉄労以下の存在となりはてています。それを見事に証明したのが、十月三十一日の「動労佐倉支部大会」なる実態であります。

デッチ上げ「支部大会」をなになんでも成功したという仮象をつくり出すために、千葉県警に出動を要請し、一〇〇名の機動隊と五〇名の職制に守られながら強行しようとしたのであります。

しかも、六・十二「津田沼事件」のデッチ上げの張本人斎藤吉司にいたっては、私服刑事を同行して「大会会場」へ登場するという、権力一体の連携プレーを演じるというありさまです。

このように「動労佐倉支部」の実態は、ことごとく権力・当局に擁護された運動になり下がっているのです。

脱退と帰任者で組織的危機
を迎えた「本部」派

こうした「本部」革マル反動分子の、権力と一体とした警察労働運動を批判する声は、土屋粹一派の足元から湧きあがっています。

「告訴路線は誤りである」「土屋は結局、金をつかまされて「運動」をやっているにすぎない」等々とひそかに内部で批判が高まっています。もとと労働運動に対する路線などは何もなく、責任もたずにただ金と陰謀的術策で組織したかゆえに、組織的破産は自明であります。

すでに「動労佐倉支部」は唯一の若手であった広島からの短期転勤者が十月で帰任し、一挙に六名の組織人員が激減しています。

津田沼においても、革マル分子嶋田誠の必死の



「オルグ」もむなしく、「本部」派の〇君は十一月一日付で国鉄を退職するという事態が発生しています。

この〇君の国鉄退職の理由は「『本部』派につけば東京の電車区に転勤させてくれる約束であったが、それを破られた」と抗議したものであります。このことこそ、自らの組合員の利益などは一切考えず、動労千葉破壊のためにのみ組合員をひきまわす、「本部」革マル反動分子の本性を暴露した典型ともいえるべき事態でありましょう。

さらに津田沼では、仙台・盛岡からの帰任者で元「本部」派の二名が相次いで動労千葉に加入しています。

また成田においても、仙台帰任者の一人、「本部」派の〇君が動労脱退を表明しています。

これが今日の「本部」革マル反動分子と土屋一派にデッチ上げられた「千葉地本」の現実であります。こうした破産的現実を隠蔽するために「本部」革マル反動分子の尻馬にのってピエロのごとく「千葉動労は崩壊的状況」とか「年度内三〇〇名組織にする」などとデマとベテンを用いているのが土屋粹であります。

全国の動労組合員のみなさん。

動労千葉は、「本部」革マル反動分子と権力・当局一体となった告訴・弾圧攻撃を粉碎し、より強固な組織体制を確立し、右翼労戦「統一」粉碎、三里塚二期着工阻止、十二・三労働者集会の成功をもって動労大改革へ更に前進する決意です。共に闘いに決起しよう。

- 右翼労働戦線「統一」粉碎・三里塚二期着工阻止
- 十二・三 労働者集会
- 一、主催 国鉄千葉動力車労働組合
 - 一、基調報告 動労千葉書記長 中野 洋
 - 一、日時 十二月三日 午後五時三〇分
 - 一、場所 東京・牛込公会堂（飯田橋駅下車）